

口渇や嚥下困難のリスク因子となりえる薬剤の処方傾向

井上 幹雄¹⁾、竹村 健志¹⁾、前田 守²⁾、長谷川 佳孝²⁾、月岡 良太²⁾、
森澤 あずさ²⁾、大石 美也²⁾

- 1) 株式会社ダイチク
- 2) 株式会社アインホールディングス

【目的】食生活に影響する味覚障害は、患者 QOL 低下の一因となる恐れがある。我々は、前回の本会にて、60 歳以上の患者における味覚障害のリスク因子が「口渇」「嚥下困難」である可能性を示唆した。本研究では、「口渇」「嚥下困難」のリスク因子となり得る薬剤(以下、被疑薬)とその処方傾向を調査し、薬局薬剤師の果たすべき役割について考察した。

【方法】当社 46 店舗に 2019 年 1 月 10 日から 2 月 10 日に来局した患者のうち、薬歴表紙の副作用欄に「口の乾燥」「口の渇」などの口渇や嚥下困難が連想される 17 個のキーワードが含まれる患者を抽出し(以下、リスク患者)、被疑薬を調査した。また、2019 年 3 月に当社 46 店舗にて 30 歳以上 100 歳未満の患者から応需した処方箋について、被疑薬の薬効分類ごとの掲載処方箋枚数を集計し、全処方箋枚数に対する割合を処方率として算出した。結果は、有意水準 0.05 としたカイニ乗検定および Fisher 正確確率検定で統計解析した。本研究はアイングループ医療研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号:AHD-0021)。

【結果】リスク患者は 122 名(60 歳以上:96 名、未満:26 名)であった。最も多かった被疑薬の薬効分類は、60 歳以上の患者では「その他の泌尿生殖器官及び肛門用薬(以下、泌尿器系)(27.1%)」、60 歳未満の患者では「精神神経用剤(以下、精神系)(42.3%)」であった。処方率は、「60 歳以上の患者への泌尿器系」が 5.3%、「60 歳未満の患者への精神系」が 41.3%であった。

【考察】「60 歳以上の患者への泌尿器系」の処方率は 5.3%しかないにもかかわらず、60 歳以上のリスク患者の 27.1%の被疑薬となっており、発生リスクが高い可能性が示唆された。薬局薬剤師は、当該薬効分類の薬剤を服用する 60 歳以上の患者について、特に「口渇」や「嚥下障害」の有無を確認し、必要に応じて処方医へ情報提供を行うことで、味覚障害を早期発見し、QOL の向上に貢献できる可能性が考えられる。

(第 13 回日本薬局学会(2019 年 10 月, 神戸)にて発表)